

On the street where we live

後ろ髪を引かれるという言葉は、あとに心が残る、情にひかされて思い切れないという意味がある。

雪男だって、その思いを噛みしめたことがある。

だが、それを実践してどうするんだ、どうしちゃったの？
何してくれたの？という疑問ばかりが空回りして、気持ちの殆どはどうしようどどうしたらの間でうろろうしたままだったのだが、とにかく対処すべきは悪魔的なコレなんだけども、祓うとかでなく、どうしたらこの訳の分からぬ事態を穏便になおかつ速やかに収束をつけるかがポイントで、さっさと元に戻す方法を見つけ出すことだ、それが優先事項。

起こされてから一時間で、やっとそこまで考えられるようになった。

「ゆきお、れいせいだなー」

「.....」

「って、ゆつてるぞ」

そうだろうとも。

「だけどたつぷり三十分かけて混乱したよ...」

奥村雪男はベッドに座り、膝の上についた肘で頭を支えるようにしたまま重い溜息を吐いた。

「学校、どうしよう...」

なにがどうしてそうなったと、雪男は何度も口にしたし、燐は燐で仕舞いには逆ギレした。つまりは分からないことに二人で頭抱えたりしたってなんの解決にもならないし、ならば戻るべく出来る限りのことはすると、試す価値はあると、雪男の頭の中はそれでいっぱいだった。

ぶつかるとか転がるとか物理的なショックを与えること、あるいは薬物、何らかの詠唱の類い...でもそれじゃあ祓魔^{悪魔退治}だ、そこは最終手段にしよう。

授業の内容は右から左に抜けていた、白文の意味を書くなら洋の東西を問わず薬物という薬物の本を片っ端から繙きたいし、放物運動の軌道計算をやるくらいなら一直線に記憶を遡っていつて原因となりそうな何かを突き止める方が余程大事だ。

「.....」

風呂上がりのゴリゴリくんまでは覚えてる。

昨夜は弁当の用意をしている兄より先に風呂呂を使い、湯船でも学ばせるために問題を書いた紙をいやでも目にするだろう場所に貼っておいた。何日かに一度はこういうことをしている、燐のあまりの向上のなさぶりにイラッときたからだ。講師としてたまには褒めてやりたいとか少しは思っているのに、それをさせないところが流石は自分の兄という気がしなくもないが、実際、悠長に構えてなどいられない状態なのである。もっと自覚しろよと迫ったらブツブツ言いつつもするようになった、剣が抜けない期間は燐にいい薬になったようだ。炎の力にばかり頼っていて何とかなると高を括り、疎かにしていた座学の必要性をやっとここで思い知ってくれたのだから。

やがて風呂上がりの兄が濡れた紙切れを手に部屋に戻ってくる、七割の解答率で、まあ五割は合っていた。微妙すぎる。

「…ここからか？」

とん、と教科書をペン先でつく。波状のグラフに並んだ円形の図表はもちろん時計に変換されている、夜九時。

「正解。流石だな、奥村」

「え？ あ、はい」

「つまり、このグラフの波形の線はこの位置から値をとればいいことになる。求めた時間はさっきも言ったように…」

すみません、全然聞いてませんでしたと言えなかった。後悔するよりテスト前に取り戻そう。気を取り直してノートを覗む。

そういえば濡れた紙切れを渡すと逃げるように食堂へ行ってしまったのだった。ゴリゴリくんを二本、ぶら下げた部屋にかえってきて、新しいフレージャー、とにとつと笑う。一緒に食おうと思つて。…つて、何故夕食後じゃないんだよ、兄さん…。風呂上がりにこたわらなくてもと怒りともつかなく、雪男はほろ苦くも笑ってしまった。五割達成の成果に気をよくしてなのかこちらに椅子を向け、やる気が見えるだけに燐を叱れなかったのだ。

それから問題を復習して、魔法円をいくつか。クロはうろちよろとはしたがやがて燐の机のところで落ち着いていだし、一時間くらいは何事もなかったと思う。

「…ら、奥村？」

「あ」



気付くと、チョコレートを持ったまま突っ立っていた。気持ちが白い線に出ていなくて助かった、でも文中の斜線にはなっている。

「ああ、そうだな。この文はここから区切るわけだ。すると構文がすっきりして訳しやすくなる」

なにもすっきりしてない。

そして雪男の個人的な悩みに関わりなく授業は続けられる。

僕にはこの単語の意味なんていまはどうでもいいんです、なんて黒板には書かないけど、続けたら何かが解けてくれるような気がして止められるまで訳を書き続けた。特例、予測不可能、初の試み。若い物理学者が実験を繰り返すシーン、やがて彼は鈍化する。新しいことに夢になるあまりに。その弊害に。

「……」

確かに、兄の覚醒を始めとするすべてのことは正十字騎士団でも初めて尽くしのことなのだろう、奥村燐という特異な存在は、やがては前例になる。そして騎士団がこれつきりにしたいのか、どうしたいのかはわからない。おそらく面白がっているのはフェレス卿だけだ。そんなのにいま、

どうしようもなく下らないけれど、でも非情に困る事が起こっている。

勉強の最中に小突きはしたけど、弱かったし、頭をぶつけたわけでもない、雪男の記憶がある限りは燐は燐で、ク口はク口だった。

「就寝は十二時前……」

尤もク口は早いうちに寝てしまっている。確認したわけではないが兄のベッドのど真ん中で丸くなっていたのだから微睡んではいただろう。何かした？ してない、今朝もそんなやり取りをした。

考えていると時間は思うより早く過ぎていくもので、兄手製の弁当のない昼となった。

「ちっとも進んでないな……」

購買部に走る気になれず、廊下をのろのろと歩く。

そういや、どうすればいいかわからなくなつて電話した理事長の答えは、大爆笑からだつたのだと雪男は思い出す。あれは失敗だった、くそうと苦みを味わいながら見遣れば階下の購買部は腹を空かせた食べ盛りの生徒達に囲まれ、仁義なき戦いが繰り広げられていた。

「ゆきお！」

声に何気なく振り向く。

「っ！」

頭になぜかクロを乗せた燐が立っていた。

ごく普通に兄を扱いて、寝て、朝六時、きよんとした顔の兄の顔を見た。その時にはすでにクロは兄で、兄はクロになっていた。なんの悪夢かと思った、これは続きか。

「……」

どういうつもりだ？

「べんきょーしろってゆわれたんだ、ゆきおがいるからへいきだって」

平気と誰が請け負った？

まるで燐が従えているかのように、学園内何故かフリーパスの犬と猫、すれ違う生徒達が不思議そうな、どこか染しそうな顔をしている。特に犬にあつては、首輪代わりのリボンが白とピンクを基調にしたピエ…もとい斬新ともいえる衣裳を身につけた理事長のチーフとおそろいで、学園のペットという噂が流れており、職員もとことこ歩く姿など慣れた風景として何も言わなくなっている。猫は猫で入

ることは許されないはずなのにどうしてかいる。広い敷地の成せるワザ、遊びに来たどこかの猫くらいにしか思われていない。正十字学園は不思議な寛大さがある。

雪男は燐の足下ですまし顔で雪男を見上げる犬を見た。

「いくらかかるかわからないし、きゅうにもどれるかもしれないからって」

「…そう」

中身がクロだから兄の口調が幼げになるのも仕方がない、ふわふわしたように聞こえるのも邪気がまったくないからだろう、いつも耳にする声なのにこんなにも違う。

「そうだよね、うん…」

理事長が自ら連れて来たということは、授業は強制参加ということだ。見れば、燐であるクロの肩にバランス良く乗っている燐のクロが雪男の表情を読み取ったのか、どうにも気まずそうな顔をした。クロは元から表情が豊かなので分かりやすい。

「おわったらじゅくだろ？　じゅくはでなくちやいけないつてりんもゆつてた」

君が『燐』なんだよ、と思ったけどあどけなく言われてしまうと訂正もしくい。

